

人とアジアゾウの共存に向けた ヒューマンディメンション研究の展開

研究背景・研究目的

獣害研究において、生態学的アプローチに基づく獣害対策が主とされてきたが、近年、当該地域人々の行動戦略、価値観等の社会的側面(ヒューマンディメンション:以下HD)に対する考慮の重要性が指摘されている。

本研究では、ゾウ害に対する環境活動支援が、(A)人々のゾウに対する行動戦略や態度・価値観、(B)ゾウ出没頻度を与える影響を、社会学・教育学・心理学・地理学・生態学等の観点から総合的に検証し、それらを成功に導くための要件を明らかにすることを最終目標とし、その遂行に向けた予備調査の実施を行った。

研究組織

本研究は、多様な分野の知見と融合が必要であり、関連分野に造詣のある外部機関の研究メンバーを招聘して研究組織を構成した。その際、研究メンバーの役割を(A)「社会調査班」、(B)「今日一句・心理調査班」、(C)「GIS分析班」と整理し、活動を進める。

(研究代表者) 岩崎慎平
(研究分担者) 藤野友和
(外部研究協力者) 新井雄喜、寺田佐恵子、中村秀次

フィールド情報

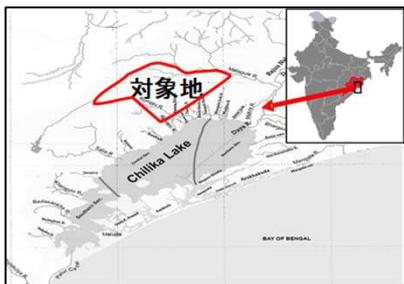


図1 調査対象地

【場所】オディッサ州・チリカ湖集水域
【支援先】69集落

【環境支援事業名】
ゾウとヒトの共生圏に向けた
生息地管理および環境教育
(2021年度～2023年度)

主な支援内容

- 住民組織化: ゾウ保全委員会
村落タスクフォースメンバー養成
- 生息地管理: ゾウ生息地周辺の植林
ゾウ忌避植物の作付
ゾウ生息地の水場の設置
- 自然共生教育: 教材配布、学校教育、
路上劇、壁絵、看板設置
啓発イベント、研修など

ゾウ出没モニタリング調査

期間	2021年12月～2024年3月
情報提供	村落タスクフォースメンバー(30集落)
モニタリング内容	野生ゾウ/ゾウ遺体/ゾウ足跡/ゾウ糞/ 作物被害/樹木被害/人的被害/建造物被害

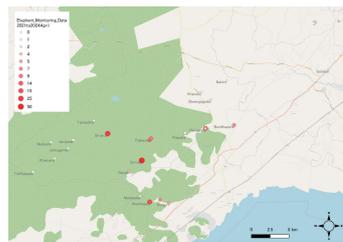


図2 モニタリング総数の
位置情報

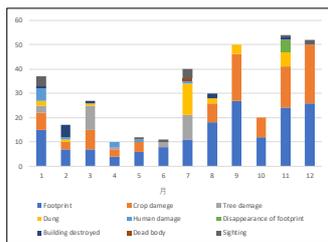


図3 月別モニタリング件数
および内容内訳



図4 調査会合の様子

長期モニタリングに基づき、ゾウによる被害が頻繁な場所の特定や季節性影響、Tree Shelterを用いた追い払い活動の効果などを今後検証する予定



図5 モニタリング情報の例

教育評価：ゾウの絵画表現を用いた分析

ゾウ害の有無と自然共生教育が子どものゾウ認知に与える影響を評価した。具体的には、子どもが描いたゾウの絵画作品を基に、①自然共生教育を実施した被害地・実施していない周辺被害地の比較、②既往研究の自然共生教育を実施していない被害地との比較、③自然共生教育の継続による絵画表現の変化(追跡調査)を、それぞれ行った。

時期(①・②)	2022年1月
対象者	被害地 30名(7～8年生) 周辺被害地 30名(6～8年生) 被害地(既往文献 ^{*1}) 47名(9～10年生)
時期(③)	2024年9月
対象者	被害地(同一人物) 30名

①被害地の子ども絵画作品の特徴

「迷惑な野生ゾウ」としての認知、実生活の描写

②自然共生教育(初期)を受けた子ども絵画作品の特徴

ゾウ害が生じた背景の認知
ゾウ害から自身の身を守る手段の認知

③自然共生教育(長期)を受けた子ども絵画作品の特徴

「共生対象のゾウ」・「神聖なゾウ」の認知へと変化

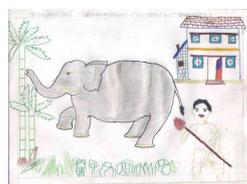


図6 教育初期の作品例



図7 教育2年後の作品